

須賀川市高木遺跡の概要と出土金属製品について

鶴見 諒平

須賀川市高木遺跡は、弥生時代後期・古墳時代前期・後期、奈良時代、平安時代、中世の複合遺跡で、各時代の居住域、耕作地、祭祀域などの景観を復元できる成果が得られている。平安時代の住居跡から出土した金属製品の一部に、保存処理後の形状と、保存処理前に作成された実測図の形状が異なっているものがあったため、再度実測を行った。

キーワード

須賀川市高木遺跡 平安時代 金属製品

1 はじめに

福島県文化財センター白河館（まほろん）は、福島県が主体となり発掘調査を行った遺跡の出土遺物を多く収蔵している。現在、その収蔵数は56,000箱を越え、その中には金属製品も多数含まれている。劣化が進行しないように保存処理が行われた木製品・金属製品等は特別収蔵庫で保管している。須賀川市高木遺跡から出土した金属製品等の出土遺物も2019年度に新たに白河館に収蔵された。

須賀川市高木遺跡の金属製品を確認したところ、報告書に掲載された保存処理が行われる前に作成された実測図と、保存処理後の資料の形状が異なるものがあることがわかった。

本報告は、高木遺跡の概要を紹介した上で、再実測を行った金属製品の写真・図および所見を速報するものである。

2 須賀川市高木遺跡について

高木遺跡は、須賀川市浜尾字高木に所在する。遺跡は、阿武隈川左岸の浜尾遊水地内に所在している。その浜尾遊水地の機能強化のための工事に先立ち、2015年～2017年の3年間にわたって発掘調査が行われた。発掘調査の成果をまとめた報告書は2019年に刊行され（福島県教育委員会ほか2019）、出土遺物は現在、福島県文化財センター白河館に収蔵されている。

遺跡からは、複数時期の遺構・遺物が確認された。各時代豊富な遺物が出土しており、報告書に図が掲載された遺物だけでも約 130 箱分に及ぶ。以下、遺跡を時期ごとに簡単にまとめて紹介する。

(1) 弥生時代後期

弥生時代では後期の遺構・遺物が確認されている。出土した遺物から、遺構は弥生時代後期終末頃のものが中心と考えられる。特筆されるのは、堅穴住居跡が34軒検出されたことである。福島県内では、弥生時代の堅穴住居跡がまとまって確認された事例は少なく、弥生時代の集落の様相がこれまでほとんど把握されていなかった。

竪穴住居跡から出土した多数の弥生土器の一部について、レプリカ法による種子圧痕分析を実施した。その結果、イネの圧痕が見つかっているが、調査区内からは同時期の水田や畑などは見つかっていない。

(2) 古墳時代前期

古墳時代前期は、最も多くの遺構が確認された時期である。確認した竪穴住居跡 112 軒という数字は、福島県の古墳時代前期集落の中でも多い方であ



第1図 高木遺跡の位置と周辺の遺跡

る。

遺構内外からは、古墳時代前期でも早い段階の土師器が大量に出土している。その中でも特徴的なのは甕で、東北地方南部ではほとんど出土しない台付甕が、平底甕に匹敵する数量出土している。また、「S」字口縁甕、結合器台、多孔の有孔鉢などが出士していて、こちらも東北地方南部ではあまり類例のない器種である。これらは関東地方の組成や技術の影響を受けた土器群と考えられている。今後、この土器群の研究の進展により、中通り地方の古墳時代開始期における地域間関係の理解が深化することが期待される。

また、レプリカ法による土器についての種子圧痕の分析では、多くのイネの圧痕が見つかっているほか、105号住居跡からは炭化したイネやオニグルミも出土している。

この他の特徴的な遺物では、鉄鎌、鉄鎌、刀子などの金属製品、横柾状の土製品などが出土している。

この時期には集落に隣接した場所に畑跡も確認されている。畑の傍からは、底部を穿孔した壺や合わせ口にした土器が置かれている箇所があり、畑の傍で何らかの祭祀が行われていた可能性が指摘されている。

(4) 古墳時代後期

古墳時代後期では、堅穴住居跡28軒のほか、畑跡や溝跡、祭祀跡が確認されている。住居跡から出土した土師器は後期前半の舞台式期に位置づけられ、その時期の集落であることが判明している。

堅穴住居跡の中には、カマドの廃絶時に祭祀行為が行われたと考えられるものも確認されている。特に、69号住居跡では鏃状の土製品が燃焼部に突き立てられた状態で見つかっている。この時期にも畑跡が確認されているが、居住域とは離れた場所で確認されている。何を耕作していたかは明らかになっていないが、レプリカ法による土器に残った種子圧痕の分析ではイネ・エゴマの痕跡が確認されている。

また、居住域から離れた箇所には土器を集積した祭祀跡が2か所あり、集落内における祭祀の痕跡と推定されている。

(5) 奈良時代

確認された奈良時代の主な遺構は、堅穴住居跡8軒、掘立柱建物跡7棟などである。掘立柱建物は小規模なものが多く、倉庫や作業小屋の機能が想定されている。

この時期の畑跡も確認されている。畑に沿うように柱列跡が確認されたため、畑の周りに柵や垣などが巡っていた可能性がある。畑で栽培した作物は不明であるものの、出土した土器の表面に残った圧痕の分析ではイネの痕跡が見つかっている。

(6) 平安時代

平安時代は、堅穴住居跡47軒、掘立柱建物跡8棟、畑跡などが確認されている。堅穴住居跡からは、9世紀前半代を中心とした土器類が多く出土している。奈良～平安時代と継続して集落が営まれていたとみられている。

金属製品も多く出土しており、鋳の下に糸の痕跡が残った紡錘車が出土したことは特筆される。

(7) 中世

中世では掘立柱建物跡、柱列、井戸跡、方形区画遺構などからなる集落跡が確認されている。出土した陶器から、集落跡は13～14世紀前後と、それ以後の時期に分かれる可能性が指摘されている。

集落跡では井戸跡と考えられる土坑が多く確認されていて、その中でも76号土坑からは多くの植物種子が出土している。種子には、スモモ、イネ他、多くの栽培植物や野生植物の種子が含まれており、周辺環境や食糧とした植物などの情報も得られている。

小結

以上のように、須賀川市高木遺跡では弥生時代後期、古墳時代前期・後期、奈良時代、平安時代、中世の遺構・遺物が確認された。

遺跡は、阿武隈川の氾濫による砂層で何層にも覆われていて、各時代の遺構の検出層は、異なる層である場合が多かった。そのため、層位の区別によって、ある程度明瞭に各時期の遺構を把握できる環境であった。それにより、各時代ごとの堅穴住居跡や

土器などの情報に加え、集落とそれに伴う耕作地、祭祀の場といった集落景観を復元し得るようになつたのは大きな成果だろう。

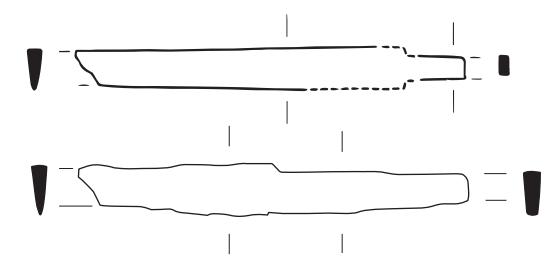
3 再実測を行つた遺物について

報告書には、計25点の金属製品の図が掲載されているが、それらの資料は全て保存処理が行われた状態で白河館に収蔵されている。

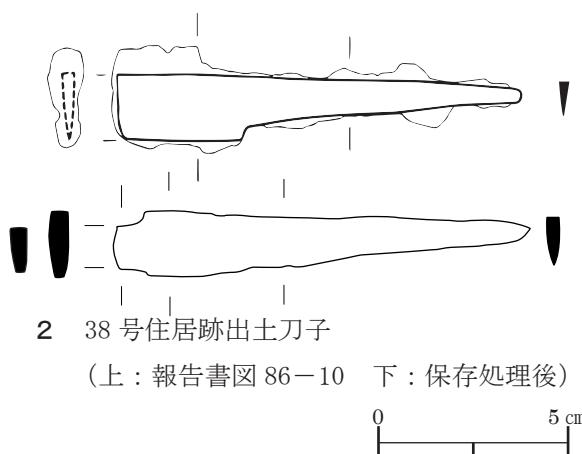
保存処理前の資料、特に鉄製品は鋳に覆われた状態であったため、もともとの資料の形状がわからぬいものが大半であった。そのため、実測に際しては、資料のX線写真を撮影し、その写真からもともとの形状が残っている部分を判断して、実測が行われた。資料の保存処理はその後に行われている。

保存処理は業者に委託して行われた。その際、再度X線写真撮影が行われ、X線写真から判明した形状になるように資料を覆っていた鋳が落とされ、その後、保存処理がなされている。

保存処理は、脱塩処理後、樹脂を含浸させ、欠損があるもの・接合が必要なものは、接合と樹脂の充填が行われるという工程で行われた。



1 37号住居跡出土刀子
(上：報告書図 83-4 下：保存処理後)



第2図 37・38号住居跡出土刀子

今回の再実測は、保存処理後の資料の形状と、保存処理時のX線写真の観察をもとに行っている。再実測を行つたのは、37号住居跡出土刀子(報告書83図4)と38号住居跡出土刀子(報告書86図10)の計2点である。

37・38号住居跡ともにカマドを持つ竪穴住居跡で、出土したロクロ成形の土師器杯などから、9世紀前半代の住居跡と考えられる。今回再実測を行つた刀子も同時代のものと考えられる。

(1) 37号住居跡刀子(第2図-1、写真1)

第2図-1は鉄製の刀子である。

本資料は2片に分かれて出土した。保存処理時に2片が接合され、剥がれ落ちた小片も可能な限り接合されている。

保存処理前の資料は鋳に覆われていて、刀身部と茎部の境にある区(まち)が肉眼では観察できない状態であった。報告書に掲載された図では、刀身部が長く、茎部は短い形状のものとして表現されている。

保存処理時に撮影されたX線写真を観察すると、報告書の図とは異なる位置に区が確認できる。保存処理時のX線写真では、資料の中央部付近に峰側の区が観察でき、刃側は破片の接点にあたる箇所のためわかりにくいが、同じ位置に区があることが確認できる。

資料は刀身部の先端、茎部の先端部が欠損している。残存長は10.3cm、刀身部の長さは5.7cm、幅は1.4cm、茎の残存長は4.6cm、幅は1.1cmである。

峰側の区は明瞭に観察できるが、刃側は峰側に比べ区が短い。これは使用後の砥ぎ減り等により刃先が減ったことによるものと推定する。

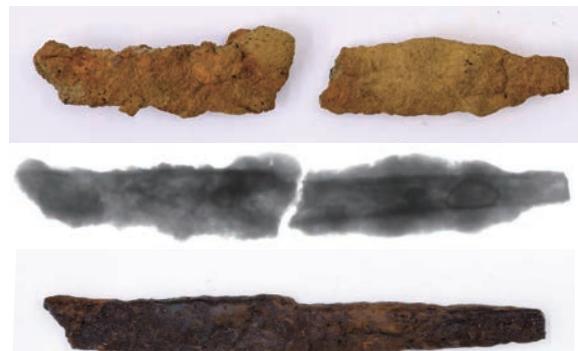


写真1 37号住居跡出土刀子

(上：保存処理前 中：X線写真 下：保存処理後)

(2) 38号住居跡出土刀子(図2-2、写真2)

図2-2は鉄製の刀子である。

本資料は2片に分かれて出土したため、保存処理時に接合されている。保存処理前は刃部と茎部の境目が特に厚く鏽で覆わっていたため、肉眼では区が観察できなかった。報告書に掲載された図では、細い箇所が刀子の柄とされている。一方で、保存処理時のX線写真を見ると、鏽が厚かった部分で区を観察することができた。また、保存処理後の資料の観察では、幅が狭く細い箇所の断面形が逆三角形であることから、その箇所が刃部であると判断できる。

資料は茎部の大半が欠損している。残存している長さは11.0cm、刃部長さ10.1cm、刃部幅最大1.8cmである。茎部から切っ先に近づくにつれて刃部幅が狭くなる。この形状は刃先が研ぎ減りしたことを反映したものと推定する。刃部と茎部の境には両側に区があり、茎の部分は幅が狭くなっている。茎部の残存している長さは0.9cm、幅は最大1.1cmである。



写真2 38号住居跡出土刀子

(上：保存処理前 中：X線写真 下：保存処理後)

4 おわりに

以上、須賀川市高木遺跡の概要と、出土した鉄製品の再実測成果を報告した。

今回報告したのは平安時代の竪穴住居跡から出土した鉄製品だが、前述したように、古墳時代前期や奈良・平安時代の鉄製品も出土している。特に古墳時代前期の住居跡である152号住居跡・216号住居跡から出した鉄鎌・鉄鎌は、福島県内では数少ない、

古墳以外から出土した前期の鉄製品である。また、平安時代の30号住居跡から出土した鉄製紡錘車には軸に鏽化した糸の痕跡が残存しているなど、新たな知見を得られたものも含まれている。

須賀川市高木遺跡は、様々な時期の遺構・遺物が見つかり、多くの成果が得られた遺跡である。しかし、報告書の刊行から日が浅く、その内容は、まだ広く知られているには至っていない。今後、その調査成果から多くのことが解明されることが期待される。

また、出土した弥生土器や土師器、特に古墳時代前期の土師器は今後の研究において重要な資料となりうるものである。

白河館においても、須賀川市高木遺跡の遺物は今後展示する機会も多くあると考えている。調査成果から様々なことを明らかにしていくことについては、その機会の課題としたい。

【引用参考文献】

福島県教育委員会ほか 2019「高木遺跡」『阿武隈川上流河川改修事業高木地区遺跡調査報告』